

耳はていねいに洗う

北木鉄

耳はていねいに洗う。普段は適当に扱っていてごめん。でも温泉ではそうもいかない。ていねいに、ていねいに、時間をかけて洗わねばいけない。洗うというより、つくると言ったほうがいいかもしれない。耳をていねいにつくる。ボディソープは半プッシュ、左の手のひらでぎゅっと握りあたためてから、右手の人差し指と中指でくるくる泡立てる。水を数滴加えると、そうそうそれを待ってたんですよと言わんばかりに一気に泡が立つからおもしろい。できあがった完璧な泡を耳にやさしく当てて、まずは軟骨からなぞる。穴の入り口もなぞる。少しくすぐったいけど我慢だ。耳の裏も忘れてはいけない。人差し指でなぞると、耳と頭をつなぐ肌がぴんと張っていることにおどろく。こんなに薄いのによく破けないな。肌も体張ってんだな。そこまで終わったら桶にお湯を溜め、両手で掬って右耳から泡を流す。すると、生まれ変わったようにつるつるした耳があらわれるのだ。はじめまして、新しい耳よ。耳をつくるってそういうことだ。

ここからはもっと集中しなくてはいけない。少し急ぎ足で移動し、湯船に肩まで浸かってまぶたを降ろす。立ち昇る湯気が耳を包む。そして風がくる。風がくるぞ。他の人がシャワーを止める音がする。遠くで鳥の声もする。昨日の誰かの鼻歌が聞こえる。去年の誰かのあくびが聞こえる。十年前の誰かの伸びをする音がする。百年前の誰かのくしゃみが聞こえる。千年年前の誰かの笑い声がする。いい湯は、耳が教えてくれるのだ。一体、どこで教わったんだっけ。人から聞いた気もするし、自分で発見した気もする。教えてもらったのだとしたら、誰かと温泉に来たことがあったのだろうか。自分で発見したのだとしたら、そのときどうして耳をていねいに洗う気になったのだろうか。

そのまま目を瞑っていると、パチャッと音がして、親子であろう二人が入ってきた。

「鼻から思い切り息を吸ってごらん」

「なんかいろんな匂いがする」

「いい温泉はね、いろんな匂いがするんだよ」

「だから鼻をちゃんと洗いなさいって言ったの？」

父親は頷き、濡れたタオルを頭の上に載せてから目を瞑った。タオルから滴る水が顔に垂れて、泣いているみたいだ。

「お母さんもさ、来れたらよかったね」

「そうだなあ」

「お母さんにも鼻洗うの教えてあげなきゃ」

父親がざぶんと顎まで湯に浸かると、大きな波が立った。

「温泉では鼻をちゃんと洗いなって教えてくれたのはね、お母さんなんだよ」

「そうなんだあ」

波が寄せては返し、どこかに消えていく。二人の会話を盗み聞きしているのがバレないように、天井を見上げて伸びをした。

後からもう一人、大きな男がやってきて、湯に浸かると同時に「ううあ」と喉を絞るような声を上げた。その声に驚いた子どもがギョッとした顔をすると、男は笑いながらごめんよと言った。

「怒ってるんじゃないよ、歓声だよ」

返事をせず、子どもは恥ずかしそうに父親にくっついた。父親が代わりに、どうもと会釈する。

「いい温泉ですね。初めて来たんですが、こんな穴場があったなんてびっくりしました」

「だろう、俺なんて数えられないくらい来てる。頭皮がじんわりあったかくなるんだよなあ、変な汗は出ないのに。だから頭をこれでもかかってくらい洗ってからお湯に浸かるといいんだ、いい温泉は頭で分かる」

子どもは父親にくっついたまま、男の頭をじっと見ている。父親もその子どもも、鼻先が赤くなっていて、そっくりな顔がもっとそっくりになっていた。鼻で愉しむ者が二人と頭で愉しむ者が一人、そして耳で愉しむ者が一人。全然違う、でもおんなじだ。ちょっと似ている、でも別物だ。会話が止み、風の音がまた大きくなる。耳を澄ますと、湯口から聞こえる音がコポポ、コポポとリズムを打っていて、温泉が息をしているみたいだった。

手の指がふやけてきたので、名残惜しいが湯船を後にする。出る前にもう一度洗い場に行き、今度は鼻をちゃんと洗ってみようかと思った。これでもかというほど頭を洗ってみようかと思った。しかしそのまま脱衣所に向かう。私には、耳が教えてくれたものがあるからいいのだ。タオルで身体を拭きながら鏡に映る自分を見ると、両耳が笑ってしまうほど赤くなっていた。照れても怒っても赤くならないのに。燃えるようなその赤色を、ずっと覚えていようと思った。

〈了〉